

狩谷椽齋『説文檢字篇』所載の字書

白田真佐子

一 はじめに

狩谷椽齋⁽¹⁾（安永四年—天保六年、一七七五—一八三五）『説文檢字篇』について、梅谷文夫氏は『説文檢字篇』は、『説文解字真本』を底本とし、五百四十の部首を画数順に配列し直し、それぞれが底本の何巻何丁に掲出されているかを検索し得るように作られた部首索引である。⁽²⁾と云う。また、川瀬一馬氏も「この檢字篇は、画引分類、説文真本段注の巻丁数を注記し、加ふるに六書故、龍龕手鑑、説文韻譜、五音篇海、玉篇、五經文字、九經字様の各書に於ける該字の出処を附記してあるから、文字の学に注意するものには頗る便利である。」と述べる。⁽³⁾

『説文』五百四十の部首とその配列の仕方は許慎の創造で、『説文』の基礎を成すものである。但し、部首や文字の検索には不便で、後人が二百六韻によつて部首を配列し直した。私は嘗て、『説文』の部首を二百六韻によつて配列した李燾『説文解字五音韻譜』と陳奐『説文部目分韻』⁽⁴⁾について調べたことがある。『説文』の画引き索引も後世著され、中国のみならず、日本でも編纂された。福田襄之介氏は、日本の『説文』檢字書として、狩谷椽齋『説文檢字篇』、太田方『説文韻譜紬』、小畑行簡『説文段注』附録「檢字の部」、島田周忠『説文解字捷見』等、

全部で六種挙げる。⁽⁵⁾この中の一つが狩谷掖斎『説文検字篇』である。

『説文検字篇』というタイトルではあるが、掖斎は『説文』のみならず、それ以外の字書も取り上げている。但し、序跋や凡例がなく、自筆稿本や写本、写本の影印本という形で伝わっているだけである（次節参照）。そこで『説文検字篇』所載の字書の性格及びその字書における部首の配列の仕方を記し、掖斎が目撃したテキストに出来る限り近いものを推定し、『説文検字篇』には巻数・葉数等のような点が記されているのか等を調べてみたい。

二 『説文検字篇』のテキスト

まず、『説文検字篇』研究の基礎となるテキストについてであるが、川瀬一馬氏⁽⁶⁾と梅谷文夫氏の指摘と『国書総目録』⁽⁸⁾の記載によると四種ある。

(イ) 『説文検字篇』 静嘉堂文庫蔵（写本）

このテキストは影印され、『日本古典全集・狩谷掖斎全集』第八に収められている（日本古典全集刊行会、一九二八年。覆刻版は現代思潮社、一九七八年）。川瀬一馬氏は「説文検字の索引『説文検字篇』（一冊、静嘉堂文庫蔵、古典全集は掖斎自筆本と言へど、実は新しき転写本なり、松井簡治博士蔵の一本も転写本なれど、これは『説文画索』と題し、江戸末期の筆になる）を撰んでいる。」⁽⁹⁾と言う。親字は小篆であり、モノクロの影印本では分らないが、原本では赤字になっている。影印本は百二十頁、原本は六十葉である。なお、『説文画索』については、(ハ)『説文画索』 静嘉堂文庫蔵（写本）で言及する。

(ロ) 『説文検字篇』 慶應義塾大学図書館蔵（自筆稿本）

梅谷文夫氏の「自筆稿本は慶應義塾大学図書館に所蔵されている。」⁽¹⁰⁾という指摘により、私も閲覧してみたが、

このテキストの特徴を一つ挙げておくと、『説文』段注の巻数・葉数が記されていることである。ここに挙げた他のテキストには、段注の欄はあっても、巻数・葉数はほとんど記されていない。それから、川瀬一馬氏の書入れ（昭和二十九年（一九五四））が挿入されていて、「狩谷棧齋自筆六書故一冊八富岡鉄齋翁旧蔵にして」云々とある。どうやら、この自筆稿本は『六書故』として伝わっているようである。親字は小篆、赤字で示されている。

(ハ) 『説文画索』 静嘉堂文庫蔵 (写本)

この『説文画索』については、本節の「イ」『説文検字篇』静嘉堂文庫蔵 (写本) で川瀬氏の指摘を引用した。私も閲覧したが、『説文検字篇』とはタイトルが異なり、『六書故』が引用されていない点を除けば、内容は基本的に一致している。『静嘉堂文庫図書分類目録』⁽¹¹⁾ 続には「狩谷望之（棧齋）編 写（渋江全善）」とあり、筆写は渋江抽斎（文化二年—安政五年、一八〇五—一八五八）によるものである。なお、親字は小篆、色はやはり赤である。

(ニ) 『説文検字篇』 東洋文庫蔵 (写本)

東洋文庫蔵岩崎文庫に『説文検字篇』があり、これは写本である。『六書通索引』(写本)、『漢隸字源画引』(刊本)と同じ函に入っているが、⁽¹²⁾ 『説文検字篇』と他の書物との関連は不詳である。なお、親字は小篆で、赤字で示されている。

以上のテキストのうち、(イ) については影印本があり、四種の中で比較的容易に見ることができるといえる。そこで、この影印本を主とし、必要があれば原本も参照し、併せて(ロ)の自筆稿本も見ることとする。(ハ)(ニ)の二種は必要があれば、参考とする。

三 『説文検字篇』と九種の字書

『説文検字篇』は一画から始まり、「廿二至卅三画」で終わるが、二十二画から三十三画までの部首は一括になっている。親字は小篆であるが、本稿では楷書に直し、一画の最初の五文字を例として比較する。すべての部首相当字を調べるのは、校訂という大掛かりな仕事になることが予想されるので、五文字というごく少数の例で試してみる次第である。最初に『説文検字篇』の写本（前節のイ）と自筆稿本（前節のロ）、そして比較の対象の字書九種それぞれと比較対照した表を掲げる。九種の字書とは、『説文』真本、『説文』段注、『説文韻譜』、『玉篇』、『龍龕手鑑』、『五音篇海』、『五経文字』、『九経字様』、『六書故』である。なお、本節で写本と言う場合、特に指定がない限り「イ」『説文検字篇』静嘉堂文庫蔵（写本）（第二節参照）を指すことにする。

(一) 『説文』真本

『説文検字篇』		『説文』真本
写本	自筆稿本	卷(篇)数・葉数
一	一上・一	一篇上・一葉
丨	一上・十三	一篇上・十三葉
、	五上・十九	五篇上・十九葉
く	十一下	十一篇下・一葉
乙	十二上・一	十二篇上・一葉

『説文』真本とは大徐本の一種で、これが『説文検字篇』の基本となる。この『説文』真本は『説文検字篇』では『説文』段注と一つの欄に並んでいるが、本稿では便宜上別々に扱う。この『説文』真本に内閣文庫蔵の『説文解字』（官版『説文解字真本』¹³）を用いたところ、『説文検字篇』の篇数・葉数と一致した。但し、「く」については、写本では葉数が脱落、自筆稿本には葉数が入っている。刊行年は文政九年（一八二六）、椋斎は天保六年（二八三五）に没しているので、彼が見た可能性は大いにある。

(二) 『説文』段注

一 、 く 乙	『説文検字篇』	写本	自筆稿本	『説文』段注
			一上・一 一上・四十 五上・五十二 十一下・二 十二上・一	一篇上・一葉 一篇上・四十葉 五篇上・五十二葉 十一篇下・二葉 十二篇上・一葉

『説文』段注とは言うまでもなく、段玉裁（一七三五一—一八一五）『説文解字注』のことである。『説文検字篇』では『説文』真本と段注の欄は並んでいるが、本稿の対照表では別立てとした。表の中で、写本の部分が空欄になっているのは、もともと段注の記載がないからである。写本の他の部分でも、段注の記載はほとんど見られな

い。自筆稿本では墨の色が『説文』真本の欄と段注の欄とで若干異なるが、椽斎の自筆と仮定しておく⁽¹⁴⁾。椽斎の見た段注のテキストは特定できないが、自筆稿本の巻数・葉数は経韻楼本の巻数・葉数と一致する。

(三) 『説文韻譜』

『説文検字篇』		『説文解字五音韻譜』	
写本	自筆稿本	巻数・葉数	
一	十一・十	卷十一・九—十葉	
一	六・卅七	卷六・三十七葉	
、	六・十九	卷六・十九葉	
く	六・四十三	卷六・四十二—四十三葉	
乙	十一・廿二	卷十一・廿二葉	

『説文韻譜』とは李燾(一一一五—一一八四)『説文解字五音韻譜』のことであり、『説文』の部首を韻別に並べ替えたもので、大徐本そのものとみなされていたこともある。『説文検字篇』では『説文解字五音韻譜』の巻数と葉数が記されている。五例挙げたのみであるが、葉数に相違がある。「一」と「く」については、該当字の始まりの葉数を記すべきところ、『説文検字篇』では終わりの葉数を記しているようである。テキストには次の和刻本を用いた：李燾(撰)、夏川元朴(校点)『重刊許氏説文解字五音韻譜』十二卷、寛文十三年(一六七三)京都福森平左衛門刊後印本。椽斎は安永四年(一七五五)生まれであるから、この和刻本を見た可能性は非常に高い。

(四) 『玉篇』

『説文検字篇』		『玉篇』
写本	自筆稿本	卷数・部首の通し番号
一	一	卷一・第一
百五十六	百五十六	卷十一・百五十五
三百卅八	三百卅八	卷二十・三百三十八
二百八十七	二百八十七	卷二十四・二百八十七
乙 三百八十八	三百八十八	卷二十・三百八十八

『玉篇』の部首は五百四十二であるが、『説文』の五百四十から単純に増加している訳ではない。⁽¹⁶⁾『説文検字篇』では『玉篇』の部首の通し番号のみ記され、巻数・葉数は省略されている。テキストには次の和刻本を用いた：梁・顧野王(撰)、唐・孫強(校)『大広益会玉篇』三十卷。天保六年(一八三四)、官版。但し、掖斎は天保五年(二八三五)に没しているので、別のテキストを用いたのは確かである。部首の通し番号で問題があるのは「一」で、『説文検字篇』写本では「六」の右横に「五」が加筆されている。影印本では分からないが、原本を見ると「五」は赤字で、番号の誤りを直していることが分かる。

以上の『説文』真本、『説文』段注、『説文韻譜』の三種の字書は『説文』とその注釈であり、『玉篇』も部首の数に若干違いがあるが、基本的には『説文』の体裁を踏襲している。『説文』の検字を編纂するならば、これで十

分と言えらるが、掖斎はさらに字書を五種類加えている。以下に、『龍龕手鑑』、『五音篇海』、『五経文字』、『九経字様』、『六書故』という五種の字書について調べることにする。

(五) 『龍龕手鑑』

一、く、之	『説文檢字篇』	
	写本 八・五十四 五十九	自筆稿本 八・五十四
	『龍龕手鑑』 卷数・葉数 卷八・五十四葉	

遼・行均『龍龕手鑑』は、部首を平声・去声・上声・入声ごとに配列し、卷一は「金部第二」で始まり、『説文』とは部首の配列が明らかに異なる。テキストには四卷本と八卷本とがあり、部首の数は杉本つとむ氏によると、⁽¹⁷⁾「朝鮮本は八卷・二四三部、宋本・高麗本は四卷・二四二部である。」今回主に用いたテキストは八卷本で、国立公文書館蔵内閣文庫の影印本であり、杉本氏の凡例には「刊年 咸化八年(二四七二)か」とある。⁽¹⁸⁾

部首「一」について、写本の欄の「五十九」には問題があるが、「八 五十四」については『説文檢字篇』と『龍龕手鑑』の卷数・葉数が一致する。更に、杉本氏によると⁽¹⁹⁾「朝鮮本(卷七 入声上)の(月魚部第五)が宋本

にはみえない。」ということ、この点も確認する必要がある（「魚厥」は「月」の反切）。そこで、『説文検字篇』四画「月」を見ると、「龍七 三十四」とあるので、椽斎の目睹した『龍龕手鑑』は朝鮮本と見なしてよい。『龍龕手鑑』朝鮮本の巻七、三十四葉にも月部がある。また、部首「一」が巻八にあることから証明できる。以上のことから、椽斎の目睹したテキストは、『龍龕手鑑』八巻本、つまり朝鮮本であったことは明らかである。

なお、写本では五十四の左横に五十九と併記されているが、この箇所を影印本ではなく原本で見ると、五十九の方が五十四より墨の色が薄い。『龍龕手鑑』八巻本（内閣文庫蔵・元和刊古活字本⁽²⁰⁾）まで見ると、部首「一」は巻八・五十九葉にあり、写本の五十九とは元和刊古活字本の葉数を示しているのかも知れない。

以上の『龍龕手鑑』であるが、部首の配列が声調別なので、部首だけでも画引きで並べておけば、検索の際便利である。更に『説文』の画引き索引と一緒にしておけば、効果が倍増するのは確実である。

(六) 『五音篇海』

『説文検字篇』		『五音篇海』	
	写本	自筆稿本	巻数・部首とその通し番号
一	十三・五十三	十三・五十三	巻十三・一部第五十四
丨	十・十五	十・十五	巻十・一部第十五
、	五・九	五・九	巻五・部第三
く			
乙			

『五音篇海』は部首四百四十四を三十六字母別に配列し、同一部首内で画数別に配列しているところがある。⁽²¹⁾『説文』とは部首の配列の仕方が異なり、部首の数も『説文』より少ないのは『龍龕手鑑』と同様である。テキストには国立公文書館蔵内閣文庫のものをを用いた：金・韓孝彦（撰）・韓道昭（編）『大明万曆己丑重刊改併 五音類聚四声篇』十五卷、明刊。『説文檢字篇』と『五音篇海』とで部首の通し番号が合わないのは、「一」と「、」である。「一」の場合「一部第五十四」、「壹部五十三」で、「一」と「壹」とを混同しているのは明らかである。「、」は部首の通し番号で言うと「三」で、三十六字母の番号が「九」（知母第九）であり、『説文檢字篇』が部首と三十六字母の番号を取り違えていることも確かである。掖齋の目睹したテキストは、私が調べたものに近いと予想される。

なお、この『五音篇海』も部首が三十六字母別に並んでいるので、『龍龕手鑑』と同様、部首を画数の順に並べておくと、検索の時に便利である。

(七) (八) 『五経文字』 『九経字様』

一	『説文檢字篇』	『五経文字』 卷数・葉数
	写本	『九経字様』 葉数
五下・卅七	自筆稿本	『五経文字』 卷下・三十七葉
	九 廿一	『九経字様』 二十一葉

『説文檢字篇』では『五經文字』と『九經字樣』とは同じ欄に並列の形で載っている。『五經文字』と『九經字樣』はともに部首別で、部首の数はそれぞれ百六十、七十六である。⁽²³⁾ 部首の数は『説文』より少なく、『説文檢字篇』でも空欄が目立つ。

『説文檢字篇』一画「一」に「五下卅七」「九廿一」とある。「五下卅七」は『五經文字』卷下の「卅七」葉のこと、「九廿一」は『九經字樣』「廿一」葉のことであり、以下のテキストの巻数や葉数と合う。テキストは内閣文庫蔵の影印本に拠ったが、⁽²⁴⁾ どちらも椽齋の生存中のものと推定される：唐・張參『五經文字』三卷、文化七年（二八一〇）刊（官版）。唐・唐玄度『新加九經字樣』一卷、文化刊（官版）。

『五經文字』と『九經字樣』は唐代の字様に分類される字書であり、⁽²⁵⁾ 異体字を知る上で必要な字書である。椽齋がこれらを並列させた理由の一つもその点にあったに違いない。なお、唐代の字様には顔元孫『干祿字書』一卷もあり、椽齋が『和名類聚抄箋註』を書く時大いに利用したことは、杉本つとむ氏が「江戸期校勘学の泰斗、狩谷椽齋も、『和名類聚抄箋註』で、縦横に本書を活用している。」⁽²⁶⁾ と指摘する。この『干祿字書』については、椽齋は『干祿字書画索』を別に編纂している。⁽²⁷⁾

(九) 『六書故』

一、 、 く 乙	『説文検字篇』	写本	一	『六書故』 卷数・葉数 第一・一葉
		自筆稿本	一	

『六書故』は、「第一 数」「第二・第三 天文」という分類の仕方をしており、その中で部首を独自の方法で配列している。大川俊隆氏によると、『文』の部首二三五、『字』の部首二四四、計四七九の部首⁽²⁸⁾があるという。索引があれば検字に便利だと予想されうる。

『説文検字篇』において、『六書故』は写本(第二節のイ・ニ)、自筆稿本とも欄外に記されていて、他の字書とは扱いが異なる。但し、『説文画索』(第二節のハ)には『六書故』がない。また、自筆稿本(第二節のロ)は、川瀬一馬氏によると書名が『六書故』となっていて、『六書故』が『説文検字篇』では欄外にあるとはいうものの、逆に一番上に位置していることによるのだろうか。欄外に置かれている『六書故』は、追加分とも思われるが、それが索引の書名になっている模様である。

さて、本稿では『六書故』のテキストに内閣文庫蔵のものを用いた：元・戴侗(撰)、清・李鼎元(校)『六書故』三十三卷『六書通釈』二卷、乾隆四十九年(一七八四)序刊。対照表では「一」にのみ『六書故』がある。

『説文檢字篇』一画十字のうち、『六書故』の記述があるのは「一」も含めて三字のみである。「一」については巻数も葉数も「一」であるが、他の二字には巻数と葉数とが併記されている。「し」の「卅三 十八」（写本のイ）は『六書故』では「卷三十三 十八葉」であり、『説文檢字篇』と『六書故』のテキストとで巻数・葉数が合う。同じく一画の「乙」は『説文檢字篇』では「卅三 廿二」（写本のイ）で些か問題があり、文字自体が不鮮明。『六書故』では「乙」は「卷三十三、二十一葉」である。椋斎の目睹したテキストは内閣文庫蔵のものに近いのである。葉数の取り違いがあるのでないだろうか。なお、『説文檢字篇』の二画以降は、『六書故』の引用が多い。ところで、『龍龕手鑑』、『五音篇海』、『五經文字』、『九經字樣』、『六書故』はすべて部首別であるが、部首の配列が『説文』とは異なる。部首の数も『五音篇海』が四百四十四で、他はそれより少ない。

『説文檢字篇』は字書を『説文』に限定することなく、それ以外からも選んでいる。但し、原則として部首のみであり、『説文』の五百四十が基本の数となり、索引として簡便な形にまとまっている。中国清朝の毛謨『説文檢字』二卷⁽²⁹⁾は、『説文』の部首のみでなく、『説文』所収の文字を収める。部首は画引きで、『康熙字典』の順である。但し、『説文』のみで他の字書は含まない。椋斎が毛謨『説文檢字』を目睹したのか否か、福田襄之介氏は「説文檢字篇編集の年月日は定かでないのであるが、椋斎は安永四年（一七七五）から天保六年（一八三五）の間の人であるから、毛謨のものができたのが嘉慶二十一年（一八一六）で、だいたい年代は前後しているわけである。しかし椋斎は毛謨のものを必ずしも見ているとは言えない。椋斎の独創の部分が非常に多いことは前述の通りである。」と疑問視している。⁽³⁰⁾『説文』の部首を主として幅広く字書を集める『説文檢字篇』、一方『説文』にある文字をすべて収める毛謨の『説文檢字』、日中で対照的な索引が編纂されたのも面白い。

四 おわりに

最後にこれまで述べて来たことをまとめておくことにする。

『説文検字篇』所載の字書九種は二つに分類できる。すなわち、①『説文』と『玉篇』、②部首別ではあるが、配列の仕方が『説文』と異なる字書である。その九種の書名を挙げてみよう。()内は部首の数。

- ①『説文』真本(五百四十)、『説文』段注(五百四十)、『説文韻譜』(五百四十)、『玉篇』(五百四十二)
- ②『龍龕手鑑』(二百四十二または二百四十三)、『五音篇海』(四百四十四)、『五経文字』(百六十)、『九経字樣』(七十六)、『六書故』(四百七十九)

『説文』そのものも元来画引きではなく、画引き索引があれば、検索に役立つ。『龍龕手鑑』、『五音篇海』及び『六書故』は部首の配列と数からして、画引き索引があると便利である。それが『説文』と一緒になっていれば、更に役立つことは第三節でも指摘した。部首の数については、『玉篇』が見かけ上『説文解字』より二つ多いが(①参照)、時代が下るにつれ、他の字書については『説文』より減っていることが本稿でも確認できた(②参照)。椽斎の目録したテキストについては、全部ではないが大体のところは推測できる。『説文』段注などはどんなテキストを見たのであろうか。段注の巻数・葉数が写本にほとんどなく、自筆稿本には入っているというの不思議な点である。『説文検字篇』は自筆稿本や写本という形で伝わり、綿密な校訂は経ていない。あるテキストを椽斎の目録したものに近いと予想しても、その字書と『説文検字篇』の葉数が微妙にずれていることが、今回の少ない例からも分かった。

写本が三種類ということとは、『説文検字篇』に価値を見出し、筆写をしたということである。親子が赤字という点まで、忠実に写している。葉数にして六十葉というコンパクトな点も、筆写をし易くしたのである。ただ、写本の形で伝わり、影印本が発行される時も写本が自筆稿本と誤解され、そのまま『日本古典全集』（第一節参照）に収められたのであった。毛謨の『説文検字』の方は出版されているので、流布の経路は異なっており、『説文検字篇』とは対照的である。

本稿では狩谷棭齋の多くの著書から『説文検字篇』を選んだだけであつたが、彼の博覧強記、蔵書の多さを垣間見ることはできた。九種の字書をできる限り、和刻本で閲覧しようとする、線装本であるから冊数が多い。冊数の多い中から、ある部首や文字を見つけるのは結構面倒な作業である。索引があれば、それは検索の一つの目安となる。それから、『説文検字篇』の自筆稿本にせよ写本にせよ、東京のあちらこちらの図書館や文庫に散在しており、『国書総目録』では容易に所在が分かつて、実際の閲覧には時間を要する。日本人学者の『説文』に関する著作を調べる際に生じる問題、その一つを本稿の作成を通して切に感じた次第である。

注

- (1) 「狩谷棭齋と『爾雅注疏』比較」については次掲文献一〇六一—一〇頁参照：藤山和子「江戸時代後期の考証学者と段玉裁の『説文解字注』」、『大妻比較文化』四、二〇〇三年。また、梅谷文夫『狩谷棭齋年譜』（日本書誌学大系94、青裳堂書店）は二〇〇四年現在上巻のみ出版されている。上巻は寛政十一年（一七九九）、棭齋二十五歳までである。
- (2) 梅谷文夫『狩谷棭齋』、吉川弘文館、一九九四年、一〇二頁。
- (3) 川瀬一馬「狩谷棭齋の業績」、『斯文』第十八編第三号、一九三六年、十六頁。
- (4) 「陳奥『説文部目分韻』考」、『東方学』、第八十四輯、一九九二年。「李燾『説文解字五音韻譜』標目の韻目」、『お茶の

水女子大学中国文学会報』第十二号、一九九三年。

(5) 福田襄之介『中国字書史の研究』、明治書院、一九七九年、三四六—三四九頁。

(6) 注(3) 前掲論文。

(7) 注(2) 前掲文献。

(8) 『補訂版 国書総目録 著者別索引』、岩波書店、一九九一年、二二七—二二八頁。

(9) 注(3) 前掲論文、十六頁。

(10) 注(2) 前掲文献、一〇二頁。

(11) 一九三九年、五二〇頁。狩谷椽齋に小学を学んだ渋江抽齋ならびに岡本況齋、小島成齋については藤山氏論文(注1前掲)の一〇二—一〇六頁の「岡本況齋、渋江抽齋、小島成齋と『説文解字注』」が参考になる。

(12) 『岩崎文庫和漢書目録』(東洋文庫、一九三四年)では、この三種の書物は「江戸時代及其後の刊本写本 漢語」に散見し、まとまってはいない。また、著者名は三種とも記されていない。

(13) 高橋由利子「官版『説文解字』の依拠した版本について——『説文真本』の二種の異本——」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第十七号、一九九八年)、一五八頁には次のようにある：「官版『説文解字』が依拠したのは汲古閣初印本ではなく、通行本であったと推定することができる。」

(14) 私見では自筆稿本を入手した人物が書き込んだ可能性もないことはないが、はっきりしない。注(1) 前掲藤山氏論文(二一〇頁)の指摘は示唆に富む：「『段注』の葉数は一部を除いて記載されておらず、ほとんど空欄のままである。『説文解字』がいつ完成したかははっきりしないが、『段注』本を手元に置いておくことがまだ出来ない頃だったのである。」

(15) 本稿で挙げる段玉裁『説文解字注』経韻樓本とは、上海古籍出版社の影印本(一九八一年)に拠る。上篇・下篇を別々に数えると三十巻となる。

(16) 『説文』と『玉篇』の部首を比較した結果の一例として、次掲文献参照：田芸衡『大明同文集挙要』五十巻(明刊、内閣文庫蔵)、「章則」の中の「玉篇字原之異」。また、周祖庠「原本『玉篇』与『説文解字』之異同」(『篆隸万象名義研究』

第一卷・上冊、寧夏人民出版社、二〇〇一年、二一六頁）も参考になる。

(17) 杉本つとむ(編)『異体字研究資料集成』別巻二、雄山閣、一九七五年、三四〇頁。

(18) 注(17)前掲文献。

(19) 注(17)と同じ。

(20) 内閣文庫蔵・元和刊古活字本は注(17)前掲文献には影印されていない。詳しくは同文献の三五三頁参照のこと。

(21) 注(5)前掲文献、三八四頁参照。

(22) 注(5)前掲文献、三八七頁参照。

(23) 『五経文字』と『九経字様』の部首とその数については、次掲文献の四〇一―四〇四頁参照：杉本つとむ(編)『異体字研究資料集成』別巻一、雄山閣、一九七五年。

(24) 注(23)前掲文献。

(25) 劉葉秋『中国字典史略』(中華書局、一九八三年)の第四章第一節(一)は次の通り：「第四章 第一節 唐代的『字様』和宋元辨形的字書 (一)《干禄字書》、《五経文字》、《新加九経字様》」

(26) 注(23)前掲文献、四〇〇頁。

(27) 狩谷椽斎『干禄字書画索』は大東急記念文庫にあり、筆者は閲覧済みである。

(28) 大川俊隆『六書故』とその四庫全書提要、『大阪産業大学論集(人文科学編)』九十五、一九九八年、三頁。党懷興『宋元明六書学研究』(中国社会科学出版社、二〇〇三年)、六十六―七十五頁の「戴侗的『父以連子、子以連孫』的文字孳乳系統」も参考になる。

(29) 嘉慶二十一年(一八一六)帰安毛氏四川督学使者署刊本。

(30) 注(5)前掲文献、三四七頁。

(うすだ まさこ・愛知大学大学部)